

魔法の言葉

横浜市立ろう特別支援学校 高校三年 山本 真理菜

寿司屋を営む両親の下で生まれた私は、明るくておてんばな女の子だった。幼い頃から私は、祖父の隣で一生懸命に働く父の姿を見て育った。そして誰よりも厳しく父に指導をしている祖父が大好きだった。

私の名前は、祖父が「真面目で優しい女の子になるように」という願いを込めて名付けてくれた。息を引き取る寸前まで、本当に私を可愛がってくれた。そんな祖父が最後まで私に語りかけてくれた言葉が二つある。その言葉は「お帰り」と「頑張れ」という言葉だ。ごくありふれた言葉だが、ずっと言い続けてくれた思い出深い言葉だ。

私は生まれた時から祖父と一緒に過ごすことが多かった。両親は家族を養うために仕事に専念していた。そのため、いつも私は一人ぼっち。そんな私と一緒にいてくれたのが祖父だった。仕事をしていても、どこかに出かけている時も、大好きな祖父といつも一緒だった。魚をさばいて、真剣に料理に取り組む姿を十五年間、ずっと見続けてきた。

祖父が「お帰り」と「頑張れ」と言うようになったのは忘れもしない中学一年の頃からだ。祖父は少しずつ変わっていく私の様子から何かを感じ取ったのか「何事にも頑張れ、いつまでも応援するよ。」という言葉を使うようになった。一日一回、魔法の呪文を唱えるように語りかけてきた。

その頃の私は、まだ小学生気分が抜け切らず、性格や考え方もまだ未熟だったため、何の意味があつて、言っているのか？ と単に鬱陶しく感じていた。私が「やめろ。」と強い口調で言っても、祖父はずっと幸せそうな顔を浮かべ、語り続けていた。私は、そんな祖父の態度に戸惑いを感じていた。

中学二年の頃、私は反抗期で今思い出しても憎たらしかった。本当に申し訳ないことをしたという思いでいっぱいだった。あの頃は、自分に素直になれず、ことごとく周囲の大人が敵に見えていた。両親に歯向かい、自分の殻に閉じ籠もることが多かった。家に帰って「お帰り。」と「頑張れ。」と言ってくれても、無視ばかりしていた。

今思えば、それは「鬱陶しい」という感情ではなく、改めて挨拶したり励まされたりするのが恥ずかしかったからであつた。本当に素直になれず、祖父とどのように接していいか良いのが分からず、ただ無視することしかできなかった。

もし、中学一年よりも前に「頑張れ。」と言ってくれたら、自然に「ありがとう。」ときつと言えただろう。それなのに、中学二年になった途端に「ありがとう。」ばかりでなく「ごめんね。」すらも言えなくなってしまった。「うん。」と言えば良いのか、「ありがとう。」と素直に言えば良いのか：祖父の寂しそうな姿を見たら更に言えなくなってしまった。

このままではいけないと考え、中学三年の時に家の中で本音を話せる弟に相談を試みた。弟は「誕生日に今まで言えなかったことや、今だからこそ言えることを全て手紙に書いてもらいたいんじゃない。そうすれば、お爺ちゃんや喜んでもくれるし、許してくれるよ」と教えてくれた。初めて祖父に手紙を書くのに手が震え、今まで経験したことがないほど緊張をしていたのを今でもはっきりと覚えている。

私が書いた手紙には、「いつもありがとう。『お帰り。』と『頑張れ。』と言ってくれるお爺ちゃんが大好きです。中学二年の時はごめんね。お誕生日おめでとう」と心を込めて書

いた。弟も手紙を書き、お爺ちゃんの誕生日に渡そうと心に決めていた。

あの日の事は一生忘れられない。直接手紙を渡すのは、正直言って心臓が口から飛び出しそうな程、凄く緊張した。手紙を渡すと、祖父は急に泣き出してしまった。突然の出来事に驚いた私は祖父の涙を初めて見た。今まで「ありがとう」という言葉が口に出せなくて悩んでいた私が勇気を出して手紙を書いて本当に良かったと、その時心から思った。

祖父は私をしっかりと見つめ、「ありがとう。」と言ってくれた。私は「ありがとう」という言葉がこんなに嬉しい言葉なのかと改めて思った。その言葉が祖父にとって精一杯の言葉だった。その出来事を機に、「ありがとう。」と「ごめんね。」を積極的に言えるようになるうと思った。そして、自分自身もつと強くなるうと心に誓った。

今、家の中に祖父の姿は無い。今思えば、「お帰り。」と「頑張れ。」をいつも言ってくれていたのは祖父が私に注いでくれた愛情だと気づいた。息を引き取る前に最後の力を振り絞り言ってくれた、「頑張れ」という励ましこそ、祖父の私への最後の思いやりだったと思う。

言葉とは不思議なものである。たった数文字の言葉を言うだけで人を変えることができる。「頑張れ」と私を応援してくれた祖父の言葉がいつまでも私の心に響いている。